

ベンチャー GOGO!

超高電力、多分野で利用

徳地 明社長



長岡技術科学大大学院卒業後、京都の大手電子部品メーカーに勤務。50歳を機に独立し、2009年5月にパルスパワー技術研究所を設立。電気学会パルス電磁エネルギー技術委員会委員、同大学客員准教授。北海道函館市出身。栗東市在住。54歳。

力
メラのストロボのように、電気エネルギーを瞬間的に放出することによって得られる超高電力（パルスパワー）。ニッチな分野だが、素粒子研究からがん治療、食品の滅菌、橋やトンネルの非破壊検査など、応用範囲が広い。その超高電力を発生させる電源装置の開発、製造を行う日本で唯一の専門会社だ。

徳地明社長は、大学院時代に使っていた研究用実験装置に、超高電力が使われていたのがきっかけ

パルスパワー技術研究所

(栗東市)



協力工場で現在試作中の研究用高電圧パルス電源。研究機関などから大口の受注があるという(草津市)

で、装置を製造した京都の企業に再編などで、次第に注力する企業就職。以来26年間、会社で電源装や技術者が減っていった。一方で、置の研究開発から製造、納品まで海外では米国やロシア、中国など全般的に携わってきた。かつては、ではどんどん電源技術が進んでい大手電機メーカーでも研究が行わなくなると、危機感を感じるようになっていたが、10年ほど前から事業になった。「日本の中でパルスパワ

ーの研究を維持し、海外に負けな技術を残したい」と50歳を機に起業した。「日本では市場が小さく特殊な分野なので、会社の中で主力になりにくい。定年までの残り10年、もう一度パルスパワーの研究開発に専念したいと思った」と振り返る。

真

空管以外にも半導体や磁気など複数のスイッチを組み合わせ、高電圧大電流の超高電力を瞬間的に何度も、しかも安定的に発生させることに強みがある。「製品を販売するより、お客様の用途や目的に合わせ、どういう回路をつくればどういう電源ができるのか、パルスパワーがどんなことに使えるのか、提案する技術コンサルタントとしての役割が求められる」(徳地社長)という。

取引先は主に、国の研究機関や大学が中心だが、最近では電機や精密機器のメーカーなど民間企業からの問い合わせや依頼も増えている。売上高も順調に伸びて、2013年4月期には約1億8千万円となる見込み。徳地社長は「技術を残すためには一人でやっていてはダメ。会社として組織で仕事を継続し、後継者を育て、社会に貢献したい」と話す。(石田真由美)